憲教類典

一三、四

卯
合
66
1

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1

ガラス使用

憲教類典

一ノ十六 將軍宣下

卯
115
1

東京圖書館

門	類	函	架	號	冊
		卯		一	一一五

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1

ガラス使用

延宝八庚申年八月廿三日

一ノ十六　将軍宣下

覚

一 御門方奴僕之人数減少すへし

一 附人等一入用心すへし

一 小サ刀指候事無用たるへし

一 あさゝ川無用たるへし

一 退出之砌諸大名其外出仕之面々

一 上下着用退出可然事

東京図書館蔵

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

一 紫衣着之外 大僧正になる
無用之事

一 将軍宣下之節御祝儀之品
之品古来之通用来何茂可為ら条
事

一 常憲院様 将軍宣下之節ゟ
御出仕之節大衣之新へ調入之新中

延宝八庚申年九月
条々

一 従先以前 御当代迄ニ其寺之
領子兄弟又者従弟迄之分并
甥舅小甥ニ至迄之乞外ニて
不過大を被申付事

一 火事之節為見廻出家衆之者
並俗家之者不及申当所之前大
衣着不ゝ 遣ス万事可為ヶ様

一 在々火事之時火消之外火元ニ
不罷出役人之外人多集候ハヽ
可申ト而御法度相背輩有之ハ捕へ
又ハ可討捨之旨可申達事
　附親類縁者之外火事場ニ
　見廻候儀可為停止事
右之通可相守者也
　申九月
此書付火事之節ハ認入此節中可掛候

宝永六己丑年四月廿六日
　覚
一 五月朔日 将軍宣下ニ付而家門
方始万石以上以下之面々布衣以上之役
人并布衣以下之面々當日長袴可
服之通候 御本丸江 登城之事
　但病気之面々 登城ニ不及事
一 諸大夫以上ハ衣冠布衣之面々ハ布衣
着用之事

一　右附札之通
右之通ニ而被仰付候　右為御礼使として
何茂ハ被出候　当日ハ延引之品有之
一　同日　於御宮下被済候　為御礼使
以使者可被差出候　御礼之節進物之儀
御代替御礼之節者　二番相勤候分者
二百疋宛　百　三百疋宛　一百疋宛　百疋宛
御礼ニ罷出候　下向之節ハ無之と申候
書付差出可申達事

但病気抔ニ而名代差出候節ハ　御使者
以使者従者方ニ而差出候事
一　寺社奉行衆ヘ御回状ニ而　寺社方より御礼使者申付
寺社方ニ而差出候事
一　四品并拾万石以上之　病気之節回状ニ退出
御礼之節御使者方ニ而勤之者差出
下知ニ而御朱印二百石以上使者を以可差出
指図ニ不及候事
御使者并両人　御返礼之節以使者
国立国会図書館　　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

一　今日右　上様ニ茂東叡様ニ
　西之丸御年寄衆申
此度付被仰上　御代参之被仰付候へ
此段申上置候也

延享二乙丑年九月廿六日

一　右大将様　御代参日光
　御宮　御参詣　御名代

御留守居様　御名代を被遣
　花田信濃守
　由良播磨守

右ハ　御付ニ而於芙蓉之間老中
御列座中若年寄播磨殿ニ而御渡し

一　九月十七日　日光　御門主太政京都
被為御着後出立以来御移替之義ニ
御付ニ付清雲院ニ而於被仰渡

之旨中務大輔殿御手通候

右之通被仰渡之書面ニ而書付させ候

立之旨ニ而相除候

延享二乙丑年九月

松平左近将監殿江渡　大目付江

御代替

将軍　宣下為御祝儀前々女中江

頂戴物無之候得共此度も前々之通被遣

大御所様　大納言様附之女中江も

前々之通被遣候

右之段可被相達候

九月

此書付　御代替之節前々之御祝儀

延享二乙丑年九月

松平左近将監殿御渡　大目付江

御代替ニ付御礼銀

御祈禱料献上

二種　五百疋　拾万石以上　一種　五百疋　五万石以上

一種　三百疋　五万石以下　一種三百疋　拾万石以上嫡子隠居

右之趣御代替初ニ付御礼之節四時より

九時迄之内二丸御門番所迄以使者可差出

尤出来合之品ニても可為用捨候

右之通可被相触候

九月

此書付　御代替ニ付献上之儀

御入此頃中のまゝ御座候

延享二乙丑年九月

松平左近将監殿御渡　大目付江

御本丸老女　豊岡　梅園　松浦　山野井

浦尾　瀬川　瀧津　小枝

同表使　岩野　長野　富尾　松尾

右何茂頭取相勤し候ニ付被下置之

大御所様老女　高瀬　清嶋

表使　松尾　清田

大納言様御乳人　岩瀬

老女　砂野

表使　町野　志賀野

右之様ニいたし此様成来し前計り

頭取ニいたし候て有之候者取之由ニ有之

此度壱統揃合之上　御代替り之節

被入此節中ニ而御沙汰

延享二乙丑年九月

明廿七日紅葉山　御宮　惣御参詣

上様ニ被　御参詣ニ付御刻限

此節局之桟敷刻限ハ半時前大紋出

御本丸ニ而御能有之節ハ以後町入之義
前々出来候ニ付右同断土佐守方へ申達ス一両ト
候節ハ以之
九月廿八日
大目付
右書付之写別紙ニ差出シ候様ニ而御触有之候ニ付石橋
ニ而写取置候事

延享二乙丑年
御奏者番江

御代替御礼申上候ニ付両西丸江出仕之
謁之義ハ年始之御礼ニ准ジ候而可然哉
此書付　御代替之部ニ御礼之部
認入置候事ニ而相済

延享二乙丑年九月廿九日
来ル朔日二ノ丸桜田御門和田倉
御門外廻り坂下御門外ニ而御通り

三ケ条下書之通如此右趣相心得候様
可被申渡候、然共其寺院共へ右之趣
并右之通可被申達候　以上

九月廿九日

安藤主計頭

水谷出羽

松平阿波守

稲垣若狭守

右之御達書之御書付写ニ而有之候
令之写ニ而御座候

延享二乙丑年十月廿二日

中務大輔殿　大目付

伊豫守殿　御目付　江御渡

覚

一 来月二日　将軍宣下ニ付御家
門方始其外諸向々布衣以上
諸役人并布衣以下寄合支配
御法眼之医師迄　登城之事

一 大御所様　大納言様附之面々も

一 御本丸ニ而催之

一 諸大夫以下之衆常布衣ニ而可有之
布衣着用之事

一 右時掛之事

右之通可被相触候
老中奉行衆被申入候可得其意候

延享二乙丑年十月廿二日

中務大輔殿 大目付
伊豫守殿 御目付 江渡

一 将軍 宣下相済候為御祝儀御米
月四万石以上之面々同七万石以下
之嫡子老中 右京大夫 阿波守殿
年寄衆加納遠江守殿 堀式部少輔
戸田淡路守 堀田加賀守江可相通
候事

一 五国主並之面々ハ十五万石以後以後可遣旨

使者ニても可相勤候事

但隠居ニ而も同断

一 支配之隠居并病気抔ニ而面ニ付

右者之内使者ニても可相勤候事

右之書付勤之節ハ此度限ニ候

延享二乙丑年十月廿二日

一 中務大輔殿 大目付

伊豫守殿 御目付 江渡ス

将軍　宣下ニ付右為御祝儀

以来万石以下以御礼之節ハ当之者

御代替御礼之通来ル廿日朝可出仕

分ハ二日出仕し分ハ三日出仕

之分ハ一日御礼ニ可罷出紫衆歳若

之通たる者ハ其日限之廻達

候事

一 万石以上ハ服忌之面ニ無之支配より
病気之節ハ平日之通ニ以使者
申来方ニ而出勤候ハヽ使者差越之
候事

一 初而之面ニ者三百目以使者
目録ニ而も使者麻上下半袴之
答事

一 万石以下諸大夫并三千石以上之衆又ハ
御役衆之内ニ而平日外病気
之節ハ三百目以使者差出候而も可数
候事

一 万石以上摂家ニ而不及申
堂上方国方新方共ニ三百目の使者
差出候方勤候得の事ニ而宮家抔万石
以上之使者麻上下目長袴ニ而
下り候半袴の答事
御礼申合候老中少將并家中へ
差出し候迄ニ不及候

一　大御所様　大納言様　献上之御
太刀馬代を西丸江の納候

十月

延享二乙丑年十月廿六日

中務大輔殿　御目付ニ
伊豫守殿

将軍　宣下付而

大納言様ゟ　御太刀馬代献之処
疱瘡麻疹水痘之節者追而上之
候ニ付右之通平常之通相納候

十月

延享二乙丑年十月廿九日　寺社奉行殿目付渡

此類御例月之　御礼無之候此段可
被相心得候

十月廿九日
去ル出仕之節 右ハ
清信院様 将軍宣下之節
御出被成候を被附書被成之節一通
認入候

延享二乙丑年十月廿九日
中務大輔殿 大目付
伊豫守殿 御目付 江御渡

将軍 宣下相済候為御祝儀来
月四日七日 老中若年寄中江
於御白書院 被召候寺社奉行江
来月十日 十二日 十三日 右三日之内
御礼為之勤九日出仕老中大目付
願之通若年寄中 加納遠江守
堀式部少輔 戸田淡路守 堀田加賀守へ
ニも申達候
主殿頭殿江 廣宗御少

之面々ハ右之旨被仰出候
觸候事
右之趣可被相觸候
十月

延享二乙丑年十一月二日
中務大輔殿　大目付江
伊豫守殿　御目付江　相渡

将軍　宣下ニ付而御禮被仰付候
御本丸出仕之面々明後四日西丸江
出仕被成候ニ付而ハ只今迄老中
右京大夫　隠岐守　若年寄
加納遠江守　堀式部少輔　戸田讃岐守
堀田加賀守ハ先達而西
丸ニ而十二日右之旨以札通ニ可有之
觸候

十一月二日

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1
ガラス使用

延享二乙丑年十一月二日

中務大輔殿　大目付
紀伊守殿　御目付　江御渡

明六日御能ニ付表向六ッ半時揃候
処明六ッ時揃候西丸御目付江も
可被通達候

十一月二日

此御書付之写　右京
惇信院様　御将軍　宣下之節

御出ニ付御礼御能之節
認入置候

延享二乙丑年十一月三日

大目付
御目付　江

明日
御本丸出仕之面々明日
西丸へ出候御城御役人六ッ半時揃付

右様之儀厚相心得候様可被申付候
用之此段ニ而申達候尤可申付候
可被申候様ニ申達候

延享二乙丑年十一月二日
伊豫守殿 御目付江渡

十一月 五日
御本丸 御道具西丸へ 公家
衆 様之西丸表向御作事掛へ

西丸御目付江茂可被申通達候
法(?)申付ル來ル右ハ
惇信院様 将軍 宣下ニ付
御出之節致附書西丸ニ移リ候
御入候

延享二乙丑年十一月二日
伊豫守殿 御目付江渡
御譜代衆
諸衆

明後五日　御本丸　御遊若本宿
於西丸公家衆　大御所様
御對顔相済蓮池ゟ西丸へ参上候
右之通可被得其意候

十一月三日

此書付之案右之
惇信院様　将軍　宣下之節
御施政之　附書殿ニ西丸之諸門
之新ゟもの認入候

延享二乙丑年十二月三日
伊豫守殿より日付江渡
　御渡詰　御譜代衆　同嫡子
明後五日　林大学　御本丸に
御遊若ら　御出候間　御從之直垂
四品十　精好諸大夫は大紋着之可
時宜城之事
右之通去ル十一月相達候西丸
日付江　前々の通達候

十一月

延享二乙丑年十一月写

中務大輔殿御消

将軍　宣下相済候御祝儀御礼

十一月

十一日　初日

十二日　二日目

十三日　三日目

右之日限御礼之内ニ而茂諸事先
達而之通ニ而相済候ニ付而茂相願候

一　右ニ付勝手ニ而御目付江茂申達ル

十一月

右日限御礼之儀ハ前例之通相入候

延享二乙丑年十一月五日

御目付江

明之日紅葉山　御宮江

一、公方様　御家督　還御以後
大御所様　大納言様江可被仰出
御家督請候様ニと被仰出候
十一月廿日
此度書付之来ル右之
惇信院様　将軍　宣下之節
御座之と残附書　御家督請之節
之方類申上候この例ニ入る

延享二乙丑年十一月三日
右同日ニ
明七日　将軍　宣下以後御規式
為成候付　殿中御目見
其申ニ寄付在服ニ而年頭之通り
此段書付　殿中之類ニ而この例ニ入る

延享二乙丑年十一月十日
右同日ニ

将軍　宣下御礼申上候、両御丸へ
出仕之者、去渇之儀年始之通ニ而
御役人も両丸御目付ゟ一同通候ニ
此書付両丸え被達候ニ付写入置

延享二乙丑年十月十三日

中務大輔殿　大目付ニ御渡
伊豫守殿　御目付

明後十五日日光御門跡、同十八日増上寺

大僧正　将軍　宣下之御礼申上ニ
紫衣之僧共登城ニ付御請申上候
両山中附揃可有之
十月十三
此書付御礼之節被達候写入置

延享二乙丑年十月十四日
御目付ニ

一 明十五日例月之通御礼有之候条可被
相触候
　十一月十四日
此節養君付之衆ニ茂右之
惇信院様　将軍　宣下之節
御出生之事被仰出養君御礼之義ハ可為通例

延享二乙丑年十一月十四日
大目付

表向出精之面々　交代寄合
　　　　　　　　表高家
一 今度　将軍　宣下相済候
祝儀明後十八日御能被　仰付候
ニ付右之面々　御出之者歴々付目長
諸大名并六半時迄ニ登　城之交替
寄合表向出精之面々ハ不及登
城候
右之通可被相触候

十月廿六日

此度書付御触之義ニ就而不被入候

延享二乙丑年十月十六日

大目付江

此度十八日御能見物ニ付、出府之
以前之面々表向ニ而出被仰付候
当分表高家御能見物以後御礼
之儀ハ来ル廿一日 御本丸西丸江
登城中大名衆隠居宅之面
之面々迄也候

右之通可被相心得候

此度書付御触之義被成候而ハ不被入候

延享二乙丑年十月十六日

大目付江

一 諸家御奏者番中嫡子嫡孫之[illegible]

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

十一月
此書付御渡之節可得其意候

延享二乙丑年十一月十八日
伊豫守殿江御目付ニ而渡

一 上野坊主共ハ
大御前様　御参詣之節江御霊屋附
御流勤方人数被申切諸割合左之
是迄者御名代之節左之通
天英院様　浄円院様　御牌前江
御参詣之節者坊主人数増可申候
右之通ニ付向後　御参詣ニ付而
御本丸ゟ御流三組坊主共ニ西丸坊主
相勤申候得共且又来ル廿日上野
御参詣之節一組坊主共ニ而増加
御本丸一西丸御流坊主人合勤組
ニ而相勤候

十一月

右之通　御本丸ニ而九ツ時伺済

其月二日ニ被仰渡候

此書付之末ニ右之

惇信院様御霊屋宮下ニ差出

御代参被附札　御奏者番

右之者共中ニ於一ヶ間入候

延享二乙丑年十一月廿二日

中務大輔殿　大目付

伊豫守殿　御目付　伺済

一　去十九日今廿二日御能拝見

明廿三日出仕並御礼廻り之儀先達而

老中月番之者ニ

大御所様之　御奏者番

延引来ル廿六日出仕並御礼廻り可

先達而老中ニも申遣候ニ付被致候

右之通ニ付添翰を以西丸御目付衆
江も右之通達ス
十月廿六日
此御書付御勝手帳ニも可記入ル

延享二乙丑年十一月廿四日
御目付え
一 来ル廿八日山王氷川明神え
御参詣ニ被遊候間可被致出書
書面之明神ニ而ニ而罷出ル
十一月廿四日
此御書付校合之上　御参詣之節
右之帳中ニ可記入ル

延享二乙丑年十一月廿五日
伊豫守殿御目付え御渡
一 明後廿八日山王并氷川明神え
御参詣之節右半時ニ而供揃

右者此度御手前ニ而も御清浄の
為御祈ニ而無之候
右之通向後ニ而可申達候
十月廿日
此書付之末ニ右之
惇信院様 将軍宣下之節
被出候を附書致し
御参詣之願延享二乙丑年中ニ而相済

延享二乙丑年十一月朔日
中務大輔殿 大目付
伊豫守殿 御目付 江御渡
一 此度山王氷川 御参詣之節
被出候御繕方申付候ニ付諸寺社
手前ニも遠慮無之ニ付可相済候
此書付之末ニ右之
惇信院様 将軍宣下之節
被出候を附書致し 御参詣

之節ハ三ヶ年服中ニ而も不被召候

寶暦十庚辰年九月十日

一将軍　宣下ニ付前々御中陰中ニ付十
八日廿日御礼ハ服中ニ付被差延
延候処十五日初而御礼十六日二
日目御礼十八日三日目御礼ニ付伺候
處ニ付被召出候ニ付御請候
右ニ付出仕いたし西之御礼ニ西ノ丸ニ出仕
いたし老中右京大夫　板倉佐渡守
御本丸ニ而御名代ニ付罷出候ニ付為御達候
依之先達而為御達候処承知仕候旨申述候
尤三日目出仕挨拶有之

一御座様御叙位ニ付為御祝儀参上
其節四ツ時御本丸西丸ニ出仕
尤御祝儀小袖半襟ニ而為御目見

一出仕いたし候処老中右京大夫板倉
佐渡守御本丸西丸御名代ニ付

右之者共旦隠居初少病氣ニ
而ニ十月番ニ老中右京大夫相添
依願ニ被仰付候、何之者鐵之

一 右之趣書ニ而ニ老中右京大夫
相合依願ニ付右ニ而以下被仰付之
縦ハ札之もの銭之右書ニ隠居
就度候之、之者札之
右之ニ而ニ相触之
九月

天明六丙午年閏十月三日
大目付江 御目付江
一 御代替ニ付紅葉山ニ而 御霊屋参拝
御家門諸家列等両月ニ而出候限
之迄之者候
正徳六年
御代替以後
御家門諸家ニ而ニ可被相心得候
壬十月三日

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

中下ニ而深く此御書付延享二巳年
九月廿四日ニ　御出候ハ御書付を以
相く付延享御書付し来候天明六
丙午年壬十月廿六日相ニ
御出候ハ、誠此御書付不残写取候

天明六丙午年壬十月廿四日
傳達有之　御目付より御渡

来月二日　常憲院様より百年御忌ニ上
こし更より　御代替御様成就ニ
物二九祠御つ善所をしく上下盛大賞
有之因より之の御鐵を請申之
こゝ道ての相向け候

閏十月
此御書付御公儀より相御つし相成候
謂入候此割中一つの相除候

天明六丙午年閏十月

一 御代替御礼初而御目見　御暇向并
御継目之節御礼被請候廉斗
目録等下候三百目御礼渡之出候事

閏十月

書付　御代替之節　暇中之節
申渡之節ニ認入書付中ニ而承候

天明六丙午年壬十月

来月朔日　御代替御礼之者
有之候外梅田御別当請候節御門
和田倉御門右三ヶ所御門下馬ニ
而如きも請候者有之候ハ、通可申
右之趣向々江可被相触候

大屋遠江守

閏十月

山川下総守

池田修理

右ハ御直書ニ而御書付写之候ニ付而ハ
召捨候ニ不及保存

天明七丁未年三月十三日

御目付江

一　蓮光院様御儀ニ
将軍　宣下ニ付御称号被為蒙上候
月十八日於本丸被為移候ニ付御二丸
御住居御普請出来之上御引移可被成候事

右ニ付表向之御祝儀被献上候ニ付
ニ而一統御祝儀

三月

此御書付御取扱ニ而被仰渡候間可被
得其意

天明七丁未年三月十四日
将軍　宣下ニ付高家衆を以
従是遠光院

一

一

一

一

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

大屋遠江守
池田修理
曲渕勝次郎

三月

右ニ御達書之御書付置候而右御控
校合之上御達書之類一ツ綴ニ入候

寛政七乙卯年三月九日

一将軍　宣下御祝儀ニ付将軍

宣下相済候御礼被為請日限
御殿向御取繕之儀計相廉
思召ニ付候三月頃御礼之儀
礼者追て可被仰出候事
右之通向々江可被相触候

三月

大屋遠江守
池田修理
曲渕勝次郎

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

四月朔日 年始 御對顔
同三日 将軍 宣下
同四日 御能
同六日 御返書
右之通御白書ニ而細川文之丞公家衆へ
延着ニ付右日限相延候様文通有之
ニ而相延候由承候ニ付廿五日相延候也
再應御同付を以この二月四日迄相延候
三月

天明七丁未年四月十二日
傳奏中より御同付を以御達
一 蓮光院様ニ
将軍 宣下ニ付御被仰出就ニ来候
十八日ヨリ之差延候處来ル廿三日ニ被仰出候
ニ之様ニ申候
四月
此書付就上之節にも御覧入候

天明七丁未年四月

十三日

年始　御對顔　西中村拝

十五日

将軍宣下之　子中村拝

御祝式

十六日

御能　同断

十八日

御返答　西中村拝

右之趣承之　西丸江目付を以て申達ス

四月

天明七丁未年四月

十五日　将軍宣下

将軍宣下　表宿

第七十一条　裁判官の懲戒処分
第七十二条　懲戒処分の事由
第七十三条　懲戒処分の種類
第七十四条　懲戒処分の手続
第七十五条　懲戒処分の執行
第七十六条　懲戒処分の公告
第七十七条　懲戒処分の効力
第七十八条　懲戒処分の再審
第七十九条　懲戒処分の時効
第八十条　懲戒処分の例外
第八十一条　懲戒処分の適用
第八十二条　懲戒処分の報告
第八十三条　懲戒処分の通知
第八十四条　懲戒処分の記録
第八十五条　懲戒処分の閲覧
第八十六条　懲戒処分の謄写
第八十七条　懲戒処分の証明
第八十八条　懲戒処分の抹消
第八十九条　懲戒処分の復権
第九十条　懲戒処分の特例
第九十一条　懲戒処分の経過措置
第九十二条　懲戒処分の施行期日
第九十三条　懲戒処分の附則
第九十四条　懲戒処分の罰則
第九十五条　懲戒処分の雑則
第九十六条　懲戒処分の補則
第九十七条　懲戒処分の附則
第九十八条　懲戒処分の附則
第九十九条　懲戒処分の附則
第百条　懲戒処分の附則

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

四月十二日

天明七丁未年四月十二日

当月十日十六日御礼之者外桜田御門馬場先御門和田倉御門右三ケ所下馬所ニ相控候儀先年相達候処公家衆御延着ニ付右日割当月廿一日廿六日御礼之者右三ケ所御門外下馬相控可申事

右之趣向〻江相達候様御付可被相達候以上

四月十二日

大屋遠江守

池田修理

曲淵勝次郎

右之通達書之写御書付写ニ候得共写之

格合之者可被探置

天明七丁未年四月

一　御広敷西丸御目付ゟ御渡

明後十五日西丸二丸勤番之面々

廣敷目袷麻上下着用之事

四月十三日

此御書付之義者

当御代　将軍　宣下之旨ニ付

御出有之候節西丸之節ニ而認候

座之義

天明七丁未年四月

御広敷御目付ゟ御渡

明廿八日御目見之御礼有之候ニ付

この表御礼者西丸御目付ゟ渡候

是ハ無用之事

四月

此御書付延享二乙丑年十月廿四日ゟ

御出有之御書付之大同小異ニ而有之

其のみ相認候

明
115
1

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

卯
115
1

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

卯
115
1

東京圖書館
門 | 類 | 函 外 | 架 | 號 一 | 冊 一一五

憲教類典

一ノ十七 御轉任
一ノ十八 御不例

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

宝永二乙酉年三月三日

覚

一 当大樹御昇進ニ付、明後五日ゟ江戸
寺社方出家・名主・百姓迄も、文字之諱
諸物頭・諸役人・寄合並之
医師ニ至迄、半袴ニ而可罷出事

一 諸大名者熨斗目長袴、大紋・布衣・素
袍・其外御目見之面々者、白帷子ニ而も長袴
ニ而出仕可有之事

一ノ十七 御転任
一ノ十八 御不例

東京図書館蔵

一 中納言様ニハ御本丸ニ而御振舞
中ノ丸西丸ニ而御座候
城事
一 為御祝儀美濃守宅中右京大夫
宅ニ而来ル十日被仰付候
致馳走之用意候
一 出仕之面々支配之者迄
不残様ニ候

宝永二酉年三月六日

宝永二乙酉年三月四日
一 御使代ハ高家之家老
御対顔之 無之御目見書院御次之間
御目見之事
一 国持大名並外様面々之所ゟ家老
御目見太広間ニ而上ル小書院披露

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

ヲ掲ク

寛永二十年三月廿日

定

一 両人奉 御書物ヲ以テ被仰出候ハ
旧領ニ而ハ無之候ヘ共
御代官ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ
御代官ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ

一 両人奉 御書物ヲ以テ被仰出候ハ
旧領ニ而ハ無之候ヘ共
御代官ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ
御奉行ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ

一 両人奉 御書物ヲ以テ被仰出候ハ
旧領ニ而ハ無之候ヘ共
御奉行ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ
御代官ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ

一 両人奉 御書物ヲ以テ被仰出候ハ
旧領ニ而ハ無之候ヘ共
御奉行ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ
御奉行ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ

一 両人奉 御書物ヲ以テ被仰出候ハ
旧領ニ而ハ無之候ヘ共
御代官ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ
御代官ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ

一 両人奉 御書物ヲ以テ被仰出候ハ
旧領ニ而ハ無之候ヘ共
御代官ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ
御奉行ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ

一 両人奉 御書物ヲ以テ被仰出候ハ
旧領ニ而ハ無之候ヘ共
御奉行ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ
御代官ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ

一 両人奉 御書物ヲ以テ被仰出候ハ
旧領ニ而ハ無之候ヘ共
御奉行ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ
御奉行ニ被仰付候ハヽ
其地ニ而ハ

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

一　右之勤ニ候而も被為立候人ニ不足申
勤候事
一　隠居并部屋住之面々病気ニ而
是又御目見不罷成候ハヽ
其子共中相当之者ニ而諸事存知候様成
者ニ而勤候事
以上
宝永二酉年三月六日

此書付数之頭衆ニ相渡候頭衆もて
相達候
宝永二乙酉年三月九日
先日者領内亀井隠岐守ニ而相尋候
右之趣被　妹之免儀等老中
右京大夫ニ而申渡候処日延引
十二月十三日南之日之内御書付

此段可申越候

宝永二酉年三月九日

此書付承知之旨可申遣候

宝永二酉年三月十六日

一 去ル十五日

公方様ゟ　御能之節御刀被下候旨

年始八朔之節

大納言様ゟも御刀ハ　御本丸中之

御頼ニ付被下置

以上ニ而相納申

一 去年中向之　此度御刀ハ返し

御本丸迄　御能ニ而差上候由

一 十四日病気ニ付御断申越ハ御断ニ被居し

而ハ十七日

公方様　大納言様ゟ御成之節

御本丸ゟ以使者を以相納メ候

右申上候通忠助殿御書付
是文　御手紙ニ以使差上候
大納言様
以上
寛永二丙寅三月十五日
此写書付数多之新ニ認入ル
寛永二乙丑年三月十四日

三月十五日
一 大廣間　御溜席ニ而御目付
以使番御車寄ヨリ席ニ而挨拶
立ニ而引取ル
一 同様ニ上ル　亦公家衆獨礼之
分御礼済御帰　退出之外ハ
大納言様　妾御ニ而出ル
中納言様
一 大納言様　妾御以後退出

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

一 諸寺社境地之儀ニ付而出入之儀
御公儀江掛合可申事

一 御供之面々麻上下
但二之丸ニ而者 麻上下御供之
様ニ可相心得候

宝永二酉年三月十七日

右御書付両通之趣被仰出候趣を以て
申入候

宝永二乙酉年三月十八日

右御条之通被仰聞候ニ付来ル廿日
御触之 御供共日光御門跡
御三家方様方迄 御譜代衆
諸役人并妻子衆共江 御井見面
之 御供仕候三番頭並外様
役人 右之書付被仰渡候書付
書付用之通相心得役人共江相達
私ヘも可相達旨被仰聞候

宝永二酉年三月十八日
清閑寺殿ニ而御談之上被仰渡候

寛保元辛酉年八月四日
一 来ル七日
公方様　御転任
大納言様　御兼任御昇進ニ付
万石以上之面々父子とも并諸
寺社諸役人当人法印法眼
之医師ハ不及出仕　大坂万石
以上ハ出仕之面々不及出仕
様ニ候
一 諸寺社之輩ハ来ル十一日御礼
素袍法印法眼ハ平服長袴
着用之事
一 手代ハ打掛ニ而可
右之通ニ付寺社奉行御触有之

前々之通相納候哉此日ハ下部無用

此日限之儀追而可相達候

八月

寛保元辛酉年八月四日

一 法官 御轉任 御兼任

御元服相済候ニ付御礼之為惣出仕

万石以下之面々父子共出仕ニ而

之年始出仕 嫡子并三男ニ

以下之面々

若君様江 御轉任ニ付御太刀目録

代 御兼任 御元服 太刀目録

大納言様江 御兼任ニ付御太刀

馬代 御兼任 御元服 太刀目録

竹千代様江 御元服ニ付御太刀

馬代

右之趣ニ而御礼可申上出仕

年始八朔ニ而罷出候節ハ平服ニ而罷出
也其後ハ不罷出候事
但諸役当分ハ一組ニ而壱人宛て
可罷出
此日当番勤メ候節ニも不限入候

寛保元年酉年八月晦日
一 御勤仕候数ニ付以御太刀目録
御礼者申上候外　御書付
御元結仕候ニ付御太刀目録
御本丸不知元御納戸ニ而御納候
且限り御内達ニ而取計ひ候
一 彦宗翁御隠居ニ付為御祝以被下
御太刀目録ニ而頂戴之
一 五十之歳ニ付御祝ニ付以被下
御太刀目録ニ而頂戴之
大納言様　竹千代様ゟ頂戴也

寛保元辛酉年八月五日

御目付江

来ル七日御規式之節当番之面々
も諸事支度ニ不及斗ニ而平常之
出　城候様相達候処平服ニハ不及
出　城可有之候

八月

寛保元辛酉年八月六日

御目付江

一　明七日御規式之節当番之面々ハ
諸事支度之分斗出
仕候様先達而申達候得共節
服ニハ不及平服ニ而今日中ニ可被
達候

八月

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

右之趣可被相達候

八月

右ハ西丸御目付ニても可申達候

寛保元辛酉年八月九日

御目付江

来ル十二日

竹千代様御元服被遊官位被仰付候

以上之面々父子并諸番頭諸
諸役人当分法印法眼之医
師直垂狩衣大紋布衣素袍
法印法眼ハ長袴着用可有之候

以上

城之

但当分ハ布衣以上出仕可有之

一 表向不残附衆

右之通ても相觸候西丸御目付

ニても可被相達候

八月

此書付以差越し候ニ付御覧入此節申
上ヶ候処

寛保元辛酉年八月十二日

一 竹千代様今日より
大納言様と可奉称候
八月十二日

右之趣西丸御目付中より申来候ニ付申達
候

此書付以差越し候ニ付御覧入此節申
上ヶ候処

寛保元辛酉年八月十八日

御目付へ

来ル廿一日

大納言様御元服御祝成相済候ニ付而も
格別ニ付三家姫諸大名より献上物
御書付被仰付候
因之居出家之寺社方之者福田(?)候者
之候處今般もて之達候処御用之候
御目付へも可申達事
八月十八日
此書付御元服之節之御門之節認入候

新中下書候

寛保元辛酉年八月十八日

御目付へ

御精任　御書任　御元服ニ付
留書付御礼

八月廿日

一　表向西中之村様

右之通去未年願之趣手形丸御目付
之節ニ而見届申候

八月

此段書付御礼之節差上置候

寛保元辛酉年八月廿二日

御目付

八月廿三日

御能之付

表向下ニ付候

右之通手形丸御目付衆より改来候ニ付

此段書付御能之節ニ而差上置候

寛保元辛酉年八月廿四日

大目付

御目付　江

一 出火　御郡代御代官様為
御検使御出役被遊　当七日来月十日御吟味
之上以赦免　御出入請候
御奉行所へ御届申上候　御届
御届者外宗旨御改帳ニ而
頭役様頭取御役人且又
御目見以上之役人当分御家老
小十人組儒者医師御免之分
右之者ハ右御達申　嫁ハ御能

見物之儀ハ此七日出分差越致候
来月二日ゟ当月出来候得御暇請
之西ハ自身罷出仕候ニ而
計致出来候
表向出礼無之
交代当分
右日限日延内々申出
相済
一 右御礼之儀御能見物仕候処

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

寛保元辛酉年八月廿七日

御目付へ

今日御能見物而札所持之者
出し置候処、出し候者割
御目見之衆ニハ在残之事候
行列又ハ御番衆ニも差出語候
相成候而ハ、明後廿九日出
城之節ニ而も可達候事

八月廿七日

右之通両丸御目付江も可相達
候事候
此書付御能之節ニも相渡候

寛保元辛酉年九月六日

明後八日御能ニ付、日光御門跡御登
城之節、其外出家衆中出
城可被相渡候

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1
ガラス使用

九月三日

此書付御触之類ニ而可被入

寛保元辛酉年九月六日

御目付へ

布衣以上御役人両丸へ

表向出礼無之交代寄合

三千石以上之寄合布衣以下之寄合

法印法眼之医師

中奥御小姓

右当九日

法衣九御礼為申上両丸へ

可罷出候処先達而御用之事

布衣以上之面々ニ而西丸御目付へ申て

可申達候

寛保元辛酉年九月九日

御目付へ

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

従天竺国異人参候ニ付

右大将様

大納言様、　御覧被遊候

御機嫌ニ付而右之通進上仕候

右之趣承知候

九月十日

寛保元辛酉年九月十三日

御自筆

通詞又平九　御譯代庄五郎

原之吉語日郎　御奏者番日郎

菊之吉様彰語日郎　吉宗郎

布衣御役人両丸　法印法眼

医師

此度十吉於両丸

此方様江　御機嫌御能ニ

御付出先達而進上者達而右之通候

寛保元辛酉年九月十三日

寛保元辛酉年九月十三日
御目付え
明後十五日例月之御礼無之候旨
此段可被相触候
九月十三日
此書付之趣
懐徳院様 御精進付右之通被仰出
之趣附書面之御礼之節於大理入候

寛保元辛酉年九月十四日
明十五日於西丸御能日見物之者
御札之儀御精進之節者
御渡之様可被相触候
九月十四日
此書付御能之節於大理入候

寛保元辛酉年九月十六日

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

沸不例

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1

ガラス使用

延享四丁卯年二月晦日

加賀守殿被仰渡

一 大御所様御床揚ニ付而御祝儀被成松平

加賀守ハ溜詰席之者詰所并御礼迄

席残り御祝儀申上夫ゟ西丸江出仕

大御所様 大納言様江御祝儀申上候

一 席ゟ詰嫡ニ而も不及其儀候

一 右之内在邑病気御断申上候面々ハ

書付不及差出候

丁十八

一 此度紀伊宰相殿尾張中将殿ゟも
　右者残暑為伺被申上候事
右之通大目付ゟ申渡ニ付為心得申達候
　二月

天明六丙午年九月二日
　大目付ゟ
一 公方様此度御不例ニ付為伺御機嫌
溜詰席之面々溜詰并奏者番御詰衆子共
月並登
城之
　但席之面々詰并奏者番嫡子共
　登
　城ニ不及候
一 病気抔ニ而不参之面々ハ名代を以可被伺候
　被仰出候
右之通可被相触候
　九月

天明六丙午年九月三日

一 安藤対馬守殿御渡

一 公方様御風気ニ付為御機嫌伺溜詰
御譜代大名高家雁之間詰同嫡子御奏
者番嫡子菊之間様縁頬詰諸番頭
諸物頭布衣以上之御役人明日四時
可罷出仕候

一 病気幼少之面々ハ掃部頭月番之老
中ニ使者ニて可差出候

一 右之外国持并万石以上之面々ハ掃
部頭月番之老中使者ニて可差出候

一 在邑之面々ハ掃部頭月番之
老中ニも飛札ニて可差越候

右之通可被相触候

九月三日

天明六丙午年九月四日

一 安藤對馬守殿御渡

公方様御風氣御同様ニ付而ハ於御様
ニ付為伺御機嫌溜詰諸大名并
席流御譜代府外様大名高家雁之間
詰同嫡子御奏者番同嫡子菊之間
縁頬詰交代寄合表高家御役人諸
當所布衣以上御役人明六ツ時ゟ罷
出仕候

一 病氣引込之面々ハ掃部頭殿月番之
老中ニ伺書可差出候

一 在邑之面々ハ掃部頭殿月番之老
中ニ而伺札可差出候

右之通可被相觸候

九月七日

天明六午年九月七日
安藤對馬守殿御渡

卯
115
1

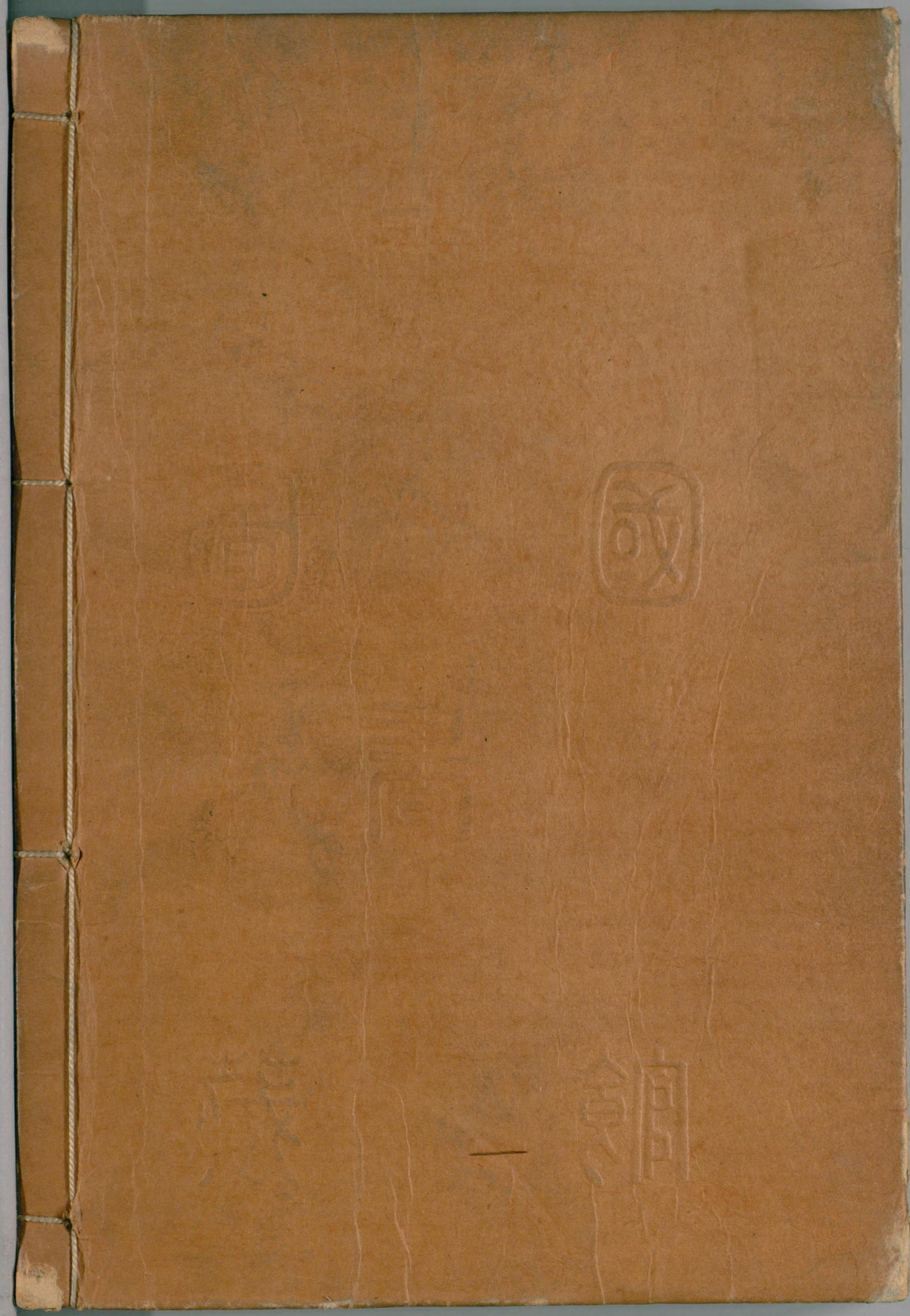
一 若君様御儀不遠程御本復為伺御機
嫌明八日四時出仕之事
右之通可被相触候
九月七日

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1
ガラス使用

卯
66
1

国立国会図書館　　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用